

最新・大学図書館事情

第一回明治大学図書館書評コンテストの舞台裏

伊能 秀明*

1 はじめに

明治大学図書館は、中央図書館（駿河台キャンパス）、和泉図書館（和泉キャンパス）、生田図書館（生田キャンパス）の三つの図書館、およびそれを支える四つの図書館事務室（三つの図書館事務室、およびその筆頭部署である図書館総務事務室）から成る。

三図書館・四事務室は、学術・社会連携部に所属する。部門の長である学術・社会連携部長は、図書館を担当する学校法人明治大学学務担当理事の「指針」によって、部門目標を設定する定めである。

2010年度の学務理事の「指針」は、下記のとおりである。

「教育・研究活動への支援強化及び社会連携事業の推進強化

学術・社会連携部の諸活動に伴う主な対象者は、図書館では学生・教職員・校友・社会人であり、博物館及びリバティアカデミーでは社会人・学生である。利用者に対して、質の高い支援を行い、教育・研究・社会貢献及び社会連携を展開していくことは最も基本的な事項であり、利用者に対するより一層の支援を強化し、サービスの向上を図る。また、より一層の社会連携活動を推進する。」（下線部、伊能、以下同。）

上記した「指針」を受けて、学術・社会連携部長は、図書館の部門目標を下記のとおり設定した。

*いよく・ひであき／中央図書館事務長

部門目標「1. 図書館利用者へのサービス向上と利用の活性化」

その内容は、「①図書館利用者に対するサービスの向上と利用率の向上を図る」ことである。中央図書館事務室は、上記の部門目標を受けて、部署目標として下記の五つの項目を設定した（洋数字・太字は目標名、その右側は内容）。

1. **選書方針の見直し** 学習用図書の選書方針を見直し、ベストセラーや一般的な読書に適した図書の受入れを増やす。
2. **読書推進活動の強化** 学生を対象とした書評コンテストなど読書推進活動を強化する。
3. **新着図書紹介の拡充** 利用者に新着図書の紹介を積極的に行う。
4. **千代田区民の利用登録手続きの見直し** 千代田区民の利用登録手続き等を再検討する。
5. **社会人向け図書館普及活動の推進** 「名作を読む会」（仮称）の開催を企画する。

本稿は、上記した部署目標のうち、とりわけ「2 読書推進活動の強化」のための方策として、初めて実施した「第一回明治大学図書館書評コンテスト」の企画から表彰式までの報告である。

書評コンテストの裏方には、中央図書館事務室員のうち宮澤順子、吉田千草、小倉葉子、矢野恵子の四名の司書が参画して、これを推進した。

本稿の末尾に、若干の私見と課題を記した。今後の参考となれば幸いである。

2 企画段階

2010年7月12日付けの企画書（案）は、下記のとおりである。

吉田司書の素案に基づき、伊能が修正し、図書館事務長会で了承を得たあと、正副図書館長に諮り成案を得た（原文の体裁・字句を若干変更して収録した。以下同）。

「明治大学図書館書評コンテスト」企画（案）

1. 目 的 「教育の場」として図書館の積極的な活用を奨励するとともに、優れた書評の顕彰を通して学生の読書活動を推進したい。あわせて、学生一人当たりの貸出冊数を平均 14 冊まで引き上げること为目标としたい。
2. 主 催 明治大学図書館
3. 対 象 本学学生・大学院生
4. 書評対象図書 明治大学図書館所蔵の図書
5. 審査方法 図書館長・図書委員・図書館職員で審査
6. 実施時期
 応募期間：2010 年 9 月 1 日～2010 年 10 月 31 日
 審査期間：11 月 1 日～12 月初旬
 入選発表・表彰式：12 月中旬（予定）
7. 広 報
 - (a) 明治大学 HP
 - (b) 明治大学図書館 HP
 - (c) 図書委員より各学部教授会での広報をお願いする。
 - (d) ポスターの掲示・チラシ配布
8. その他・検討事項
 - (a) 優秀作には、表彰状及び副賞（図書カード等）を授与する。（受賞者 8 名程度で 3 万 5 千円程度）
 - (b) 受賞作品を図書館 HP と紀要に掲載する。
 - (c) 書店等の出入り業者に協賛をお願いする。
 - (d) 表彰式には、学長・図書館長の出席をお願いする。
 - (e) 三キャンパスの図書館内に受賞作品展示コーナーを作り、対象図書を貸出用に複数購入して設置して、貸出冊数促進につなげる。
 - (f) 毎年の恒例イベントとすることを目指したい。

9. 添付資料（参考）

- (a) 松山大学図書館 書評賞 応募要項
- (b) 流通科学大学図書館 書評コンテスト 募集の概要
- (c) 桃山学院大学図書館 書評賞 募集
- (d) 京都産業大学図書館 書評大賞 応募要領
- (e) 【その他、大学図書館等が主催で行っている類似のコンテスト（判明分のみ）】

沖縄国際大学図書館（書評・映画評賞）、大阪芸術大学短期大学（書評・映画レビュー大賞）、摂南大学図書館（摂大文化大賞）、敬愛大学メディアセンター（読書感想文・書評コンテスト）、徳山大学図書館（読書感想文・書評コンクール）、目白大学岩槻図書館（読書感想文「私の一冊」）、千葉商科大学付属図書館（読書感想文コンテスト）

企画の成立を受けて、全体スケジュールと分担者を表（掲載略）にまとめた。ただし、予定はあくまで未定であり、諸般の事情で進行に遅れが生じたことも率直に表明しておく。

3 告知段階

下記のチラシをはじめ、ポスターなど所定の方法でコンテストの実施を周知した。ちなみに、作品募集と入選者発表のポスターデザインは、宮澤司書の手を煩わせて作成された。

明治大学図書館「第1回書評コンテスト」応募要領

明治大学図書館では、学生の皆さんが読書に一層興味を持ち、積極的に図書館を活用してくださることを目的として、下記の要領で「第1回書評コンテスト」を開催いたします。どうぞ奮ってご応募ください。

【書評とは…】

本の内容紹介・分析をし、それに関して客観的かつ論理的に評価・批評をした文章のこと。主観的に感想や意見を述べる読書感想文とは違います。

朝日・読売・毎日新聞など、一般紙の日曜版に掲載されている「書評欄」などを参考に見てみてください。

1. 応募資格 本学学生・大学院生
2. 書評対象図書 明治大学図書館が所蔵する図書
3. 応募要領
 - ① 図書1冊につき、800字以上1,200字以内とする。
 - ② 必要事項：書評対象図書名（請求記号）・学部・学生番号・氏名を明記すること。（字数にはカウントしません。）
 - ③ 原則として、ワープロ（Microsoft 社 Word 等）で作成すること。
 - ④ 2篇以上の応募も可。ただし、受賞は一人1篇とする。
 - ⑤ 応募作品は、本人の書いたオリジナル未発表作品であること。
 - ⑥ 応募作品の使用権は、明治大学図書館に帰属する。
 - ⑦ 入選作品については、「明治大学図書館ホームページ」及び「明治大学図書館紀要」に掲載予定。
4. 応募期間 2010年9月1日（水）～10月31日（日）
5. 提出先 E-mail に添付して送付のこと。
 - ① メールアドレス: review@lib.meiji.ac.jp
 - ② 件名に「書評コンテスト応募・学生番号・氏名」を記入のこと。
6. 選考 書評コンテスト選考委員会（図書館長・副館長・図書委員・図書館員）
7. 表彰
 - ① 最優秀賞1篇 表彰状及び副賞
 - ② 優秀賞2篇 表彰状及び副賞
 - ③ 佳作5篇 表彰状及び副賞
 - ④ その他特別賞（予定）
8. 入選発表 2010年12月中旬（予定）図書館掲示及び図書館ホームページで発表
9. 表彰式 入選者を対象に、後日図書館で行う予定。

以上

4 募集段階

2010年9月、三図書館で各二回合わせて六回の書評の書き方講座を開催した。そのために作成したレジュメを以下に引用する。会場では、聞き手にあわせて、口頭で事例を示し、若干の事項を補足した。

受講者は、合計約60名だった。選考終了後、受講者の中に最優秀賞などの入選者が、三名含まれていたことが判明した。

明治大学図書館書評コンテスト（書評の書き方講座資料）

—執筆へのロードマップ—

1. 書評 本の内容を客観的に分析・紹介し、論理的に批評した文章である。
2. 目的 学生らしく、真摯に本を読み、理解し批評する姿勢を身に付けたい。書評を通じて、本の読み方、論理的な文章の書き方を学び、自立した思考力を養うことを目的としたい。

（参考）書評にも下記のとおりさまざまなタイプがある。

- ① 新聞に掲載された書評：一般紙・図書新聞・週刊読書人など。
一般読者向けに比較的自由に書評し、書評者が持論を展開するケースもある。
- ② アカデミックな書評：学術雑誌など
研究者・専門家が、本の内容を適切・客観的に紹介するのを要点とする。
- ③ ブック・レビュー的な書評：Amazon、Yahoo、個人の新刊紹介サイト、書店陳列棚などで本を軽妙にコメントしたもの。

大学図書館書評コンテストに相応しく、自分らしい作品を工夫していただきたい。

3. 取り組み方

- ① 本を読み解く。
著者は、何をテーマとし、どのような着想や方法で書き進め、どのように主張・結論したか紹介できるようにする。

- ② 論点やポイントを提示する。(ここまでは、かなりの人たちが意識せずに日常的に実践している。)

著者が重視した論点、自分が注目したポイントを三つくらいにまとめて提示する。

- ③ 論点を客観的に論評する。

論点について、論理的・客観的に文章化して批評する。

たとえば、合理性、正当性、適切性、具体性、普遍性、新奇性、実現性、説得力、共感、美しさ、是非善悪（良し悪し）、面白さとか気づいた点を評価し、適切に第三者に伝わるように理由付けを考える。

4. 書き方のノウハウ

- ① 目次の章立てを見ながら、本全体の構成に目を通す。

- ② チェックやメモを付けながら読む。

著者が強調した点、書評者が重要と思ったり、疑問に感じたりした点を見つける。

とくに「まえがき」「あとがき」に注意して読む。

気づいたことをメモしたり、付箋や小型ノートに書き出す。

(メモの例) P○○ (頁数) L△△ (行数) ～「●●●●
(事項)」のこと

- ③ 論点を見つける。

チェックやメモを再確認する。

各章のキーワードを確認する。

キーワードを思い浮かべながら、チェックした記述を重点に、本を再読する。

再読して、チェック不要と感じた記述は除外してかまわない。
各章のキーワードを取捨し、最もふさわしいと思う三点くらいに論点を絞る。

- ④ 論点を要約する。

著者が強調した記述、書評者が重要と思った記述を要約し、箇条書きにする。

こうした作業で、書評の骨格となる部分が出来あがる。

⑤ 論評し、文章を練って書評を仕上げる。

本の内容を客観的に紹介し、論理的に批評した文章を工夫する。
引用文は、カギ括弧「」に入れ、書評者の文章と区別する。

余りに長文すぎる引用は控える。字数稼ぎと誤解されるから。

引用は、要約文やキーワードだけでも良い。

ただし、引用が全く無いと、書評者が身勝手な持論を展開している印象を与える。

執筆中、時々音読し、適切な表現に納得するまで（3回位）、書き直して仕上げる。

5. セルフ・チェックポイント

① 書式・字数は、コンテストの応募要領とおりかどうか。

② 作品の意義・ストーリーを理解したことが、書評文の全体から読み取れるかどうか。

③ 文章がわかりやすく工夫され、表現が適切・巧みであるか。
とくに書き出しと締めくくりの文章は、推敲したかどうか。

④ 段落ごとに執筆意図が明確に書かれ、全体的構成がしっかりして、筋道が首尾一貫しているかどうか。
たとえば、「起承転結」などが意図されているか。

⑤ 単なる作品紹介にとどまらず、書評者の見解・主張が伝わりやすく書かれているか。

なお、レジュメでは割愛したが、先行事例を見て重要と思われた判定基準として、下記の四点がある。あらためて紹介する。

① 読解力 作品の意味・ストーリーを理解したことが、書評文の全体から読み取れるか。

② 表現力 文章がわかりやすく工夫され、表現が適切・巧みであるかどうか。とくに書き出しと締めくくりの文章は、推敲のあとが見られるかどうか。

③ 思考力 各段落が執筆意図によって書かれ、全体的構成がしっかりしているかどうか。筋道が、首尾一貫しているかどうか。

- ④ 創造力 単なる作品紹介にとどまらず、書評者の主張がしっかり書かれているか。

5 予備選考段階

応募期限までに 27 作品を受け付けた。11 月初旬から、下読み（予備選考）を各図書館の職員に依頼した。その方法は、下記のとおりである。

第一回「明治大学図書館書評コンテスト」応募作品の下読み（予備選考）について（協力依頼）

このたび掲題の書評コンテストについて、27 編の応募作品を受け付けました。

ついては、下記を目安・手順で、下読み（予備選考）にご協力くださるようお願いいたします。

1. 目 的 応募作品のうち、審査に挙げる候補作品を選び、選考作業の円滑化を図るため。
2. 目 安 下読み者の既読・未読を問わず、当該図書を読みたくなくなったかどうかを軸として、応募作品を判定する。その際、誤字脱字の有無・表現の巧みさについても考慮する。
3. 手 順

① 判定には、下読み者一人あたりの持ち点を 20 ポイントとする。但し、20 ポイント未満の行使で採点を終えることも可とする。

② 上記①にもとづき、応募作品を下記のとおり採点する。

ア) ポイントの付与は、下読み者の自由裁量とする。ぜひ推薦したい作品により多くポイントを与えることは、可とする。

例 1	A 作品	10 ポイント	例 2	A 作品	0 ポイント
	B 作品	4 ポイント		B 作品	20 ポイント
	C 作品	3 ポイント		C 作品	0 ポイント
	D 作品	2 ポイント		D 作品	0 ポイント
	E 作品	1 ポイント		E 作品	0 ポイント
	F 作品	0 ポイント		F 作品	0 ポイント

- イ) 推薦したい複数の作品に、ポイントを振り分けることも、可とする。

例3 A 作品 5 ポイント
B 作品 5 ポイント
C 作品 5 ポイント
D 作品 5 ポイント
E 作品 0 ポイント
F 作品 0 ポイント

例4 A 作品 2 ポイント
B 作品 2 ポイント
(中略)
I 作品 2 ポイント
J 作品 2 ポイント
(10 作品に 2 ポイントずつ)

- ウ) 整数のみ使用し、小数点の使用は不可とする。

4. 表 彰 下記のとおり、最大 12 名まで表彰可能。但し、できる限り多くの応募者が受賞できるようご配慮をお願いします。

(特別賞)

最優秀賞 1 名

紀伊國屋書店賞 1 名

優秀賞 2 名

三省堂書店賞 1～2 名

佳作 5 名

丸善賞 1 名

5. 下読みの参加条件 本コンテストの意義を理解し、前向きに協力できる図書館関係者。下読み者（予備選考者）は、審査終了後、「協力者一覧」に所属・氏名を掲載することがあります。
6. 期 限 2010 年 11 月 13 日（土）
7. 応募作品の所在 書評コンテスト応募の全作品をファイルサーバに入れました。応募順の番号つきファイルになっています。
8. 採点表の所在 上記のファイルの末尾にある「書評コンテスト応募一覧」を開き、表の右端にある「採点・備考欄」に採点を記入し、下記あてに送信してください。
9. 採点表の提出先・問合せ 中央図書館事務室 担当者（略）

2010 年 11 月 17 日現在で、10 名の図書館職員が下読み（予備選考）を行ない、予備採点表の作成が完了した。

予備採点表は、受付順・得点順で配列した 2 種類にまとめた。

6 選考委員の委嘱

図書館長の意見をうかがい、12月初旬に第一回明治大学図書館書評コンテスト選考委員会を発足させた。委員会の構成は、下記のとおりである。

吉田 正彦	図書館長（文学部教授、委員長）
浜口 稔	副館長（理工学部教授）
畑中 基紀	副館長（経営学部准教授）
美濃部 仁	委 員（国際日本学部教授）
佐々木秀智	委 員（法学部准教授）
白井 利光	学術・社会連携部長
菊池 亮一	図書館総務事務長
永島 英明	生田図書館事務長
伊能 秀明	中央図書館事務長

（注）当初予定の坂口雅樹和泉図書館事務長は、予備選考に関与のため菊池事務長に交代。

各選考委員には、「5 予備選考段階」に準じて、改めて「3 手順」のとおりに採点を依頼した。

7 書評コンテスト選考委員会

書評コンテスト選考委員会は、下記のとおり開催された。

- 1 日時 12月20日（月）午前10時から
- 2 場所 図書館資料室（中央図書館1F）
- 3 議題 (1) 第1回書評コンテスト受賞作品の選考について
(2) 講評について
(3) その他

選考の過程では、応募作品の評価のあり方、当該作品への授賞の是非などをめぐって、白熱した議論が交わされ、会議時間は二時間に及んだ。

以下は、議事次第である。委員会の概要をまとめた議事録は、部外秘に属する内容もあるので、採録を割愛する。

第1回 明治大学図書館書評コンテスト選考委員会 議事次第

日 時 2010年12月20日(月)10:00～11:00(予定)

場 所 中央図書館1階 図書館資料室

委員長 吉田 正彦(館長)

委 員 浜口 稔(副館長・理工) 畑中 基紀(副館長・経営)

佐々木 秀智(法) 美濃部 仁(国日)

白井 利光(学術・社会連携部) 菊池 亮一(図書館総務事務室)

伊能 秀明(中央図書館事務室) 永島 英明(生田図書館事務室)

事務局 吉田 千草(中央図書館事務室) 矢野恵子(中央図書館事務室)

事前配付資料

【No.1】明治大学図書館「第1回書評コンテスト」応募要領

【No.2】応募作品の採点について

【No.3】第1回書評コンテスト採点票

【No.4】応募作品27点(プリント)

当日配付資料

【No.5】最終採点票

【No.6】「第1回明治大学図書館書評コンテスト」受賞作品選考用紙

【No.7】表彰状文案

議 事

(【 】内数字は資料No.)

1. 委員長挨拶
2. 委員の紹介
3. 第1回 明治大学図書館書評コンテスト 採点状況報告 【No.5】
4. 受賞作品の選考 【No.6】
5. 委員からの講評
6. 受賞者の表彰
 - (1) 表彰状文案 【No.7】
 - (2) 表彰式(日時・場所・出席者)
 - (3) 受賞者の発表(HP、ポスター等)

7. その他

講評については、下記のような意見があり、順不同で紹介する。

- 第一回の応募は、27 作品で図書館利用者数からみれば少数にとどまった。第一回なのでなるべく多くの応募者に賞を与えたいと願いつつも、一定程度以上のレベルの作品を選定した。
- 大学生が、この書評を読んで当該図書を読みたくなるかどうかを軸として選定した。
- 同じ応募作品について、委員の間でかなり評価が分かれる場合もあった。
- 書評対象の作品には、文学作品が多く、自然科学や社会科学の分野での書評が少なかった。分野に偏りが見られたのは、やや残念であった。
- 遺憾ながら、誤字や誤った言葉遣いが少なからず見受けられた。書評とはいえない、感想文どまりと思われる作品もあった。

次の三点が、委員会で確認された。

第一に、公表する作品は、佳作以外の六篇とする。公表前に、誤字脱字があれば修正し、受賞者にその旨を伝え、了承を得た上で公表する。

第二に、複数の委員からの意見で、剽窃の有無について確認を行うこととし、事務局に点検の作業が一任された。(後日、確認したところ、剽窃の疑いをもつ作品はなかった。)

第三に、最優秀賞はじめ六篇(佳作を除く)を掲載した小冊子を発行し、コンテストの周知に資することとした。

8 仮想 書評コンテスト選考委員会

次に、以下の文章は、当初想定した会議の進行である。

実際の委員会の模様とは大きく異なるけれども、後日の参考までに掲載する。

第1回 明治大学図書館書評コンテスト選考委員会 議事次第

議 事

(【】内数字は資料 No.)

1. 委員長挨拶

一伊能から「はじめに、委員長の吉田図書館長からご挨拶がござい
ます。」(挨拶2分間程度)

「有難うございました。引き続きまして、議事の進行を委員長にお
願います。」

2. 委員の紹介

一館長「それでは、あらためて委員の紹介を伊能事務長からお願い
します。」

3. 第1回 明治大学図書館書評コンテスト 採点状況報告 【No.5】

一館長「つぎに、最終段階の採点状況について、事務局から報告し
てください。」

4. 受賞作品の選考 【No.6】

一館長「引き続き、受賞作品の決定を行ないます。得点の高い順か
ら、【No.6】の選考用紙に当てはめて、順番に受賞作品を決める方式
で宜しいでしょうか。

ちなみに、表彰内容については、すでに応募要領で周知されていま
す。改めて、事務局から表彰内容について説明してください。」

一事務局 (説明)

一館長「それでは、得点の順に【No.6】の選考用紙に当てはめて受
賞作品を決定します。事務局から順番に発表してください。」

一事務局 (順次、受賞作品・氏名を告げる。)

一館長「受賞作品・受賞者は、以上のとおりとします。」

5. 委員からの講評

一館長「つぎに、各委員から若干の講評をいただきたいと思います。
いただいたコメントを事務局でメモしたあとに文章化して、授賞式
での講評といたします。ついては、できる限りメモし易く、お一人
2分間程度でお願いできれば幸いです。内容は、受賞作品の感想や

応募者全体への意見、次回の応募者への期待など何でもかまいません。とりわけご意見がなければ、パスされて結構です。

それでは、副館長から名簿の順にお願いします。」

—副館長（2分間程度。以下、各委員が続ける。）

—事務局（各委員のコメント（それぞれ2分間程度）をメモする。）

—館長「以上で、各委員からの講評を終わります。」

6. 受賞者の表彰

(1) 表彰状文案

【No.7】

—館長「つぎに、表彰状文案の書式についてご意見を伺います。

【No.7】のとおり、縦書き・横書きのどちらが宜しいでしょうか。（書式を決める。）

それでは、文案を事務局から読み上げてください。」

—事務局（読む）

—館長「これで宜しいでしょうか。」（一同の了承を得る。）

(2) 表彰式（日時・場所・出席者）

—館長「つぎに、表彰式の日時・場所・出席について、伊能事務長からお願いします。」

—伊能「日時は1月中、場所は図書館内、出席者は選考委員会の皆さまには、ぜひご都合が宜しければご出席いただければ幸いです。学長のご臨席を要請して、学長秘書と調整中です。館長ともご相談して調整がつき次第、あらためて連絡します。宜しくお願いします。」

(3) 受賞者の発表（HP、ポスター等）

—館長「受賞者の発表方法について、事務局からお願いします。」

—事務局「HP、ポスター等で発表します。」

—副館長「応募要領を見ると、入選作品については『図書館ホームページ』及び『明治大学図書館紀要』に掲載予定」とありますが、方針に変更はありませんか。」

—事務局「変更ございません。」

7. その他

—館長「その他の議題として、何かありましたら、お願いします。」

(とくに無ければ)

「それでは、以上で選考委員会を終了します。」

9 表彰式

企画立案以来、7ヶ月間を要したプロジェクトが、ようやく晴れの表彰式を迎えることができた。改めて、選考の経過を簡単に振り返っておきたい。

募集期間は、2010年9月1日(水)から10月31日(日)までで、告知はポスター・チラシ・HPで行なった。三キャンパスで各2回ずつ「書評の書き方講座」を行い、計約60名の参加者を得た。

応募作品数は、大学院生・学部生から27篇が提出された。

11月に明治大学図書館の司書のうち有志10名が下読み(予備審査)を行い、仮採点をおこなった。

書評コンテスト選考委員会は、12月20日(月)午前10時から開催され、選考委員長(図書館長)はじめ9名の委員が出席し、9名の採点結果を仮採点表に合算し、最終的に集計した。そのあと、ポイントの高い作品から順番に受賞の適否について意見を開陳しながら、最優秀賞から佳作までの受賞者を約二時間かけて選定した。

第1回 明治大学図書館書評コンテスト 表彰式次第

日 時 2011年2月1日(火) 15:00~16:00

会 場 駿河台キャンパス 中央図書館地下1階 多目的ホール

- | | |
|---------------|-----------------|
| 1. 開 会 | 中央図書館事務長 |
| 2. 選考委員・来賓の紹介 | 中央図書館事務長 |
| 3. 選考の経過 | 畑中副館長 |
| 4. 表彰式 | 表彰状: 吉田図書館長 |
| | 副 賞: 畑中副館長・来賓 |
| | 受賞者紹介: コンテスト事務局 |

(以下に、表彰式の模様を実況中継風に再現して採録する。受賞者の紹介は、矢野司書、吉田司書が前・後半を交替でおこなった。)

それでは、ただいまより表彰状、副賞の授与を行います。

表彰状の授与は、吉田図書館長にお願いいたします。

副賞の授与は、畑中副館長にお願いいたします。

なお、特別賞の副賞授与につきましては、ご出席の各書店代表者様よりお願いいたします。

お名前を呼ばれた方は、図書館長の前にお進みください。

最優秀賞は、文学部1年川島かつ江さん、受賞作品は、杉浦日向子^{すぎうら ひなこ}著『風流江戸雀^{ふうりゅうえどすずめ}』です。

(拍手。「おめでとうございます。」以下同じ。)

優秀賞は、2編あります。

まず、法科大学院法務研究科1年根本真弥^{ねもとしんや}さん、受賞作品は、星新一著『ポッコちゃん』です。

つぎに、文学部4年河合亜子^{かわい あこ}さん、受賞作品は、天童荒太^{てんどうあらた}著『悼^{いた}む人』です。

特別賞は、3編あります。各賞の五十音順に発表します。

紀伊國屋書店賞は、文学部3年正月瑛^{しょうげつあき}さん、受賞作品は、カフカ著『変身』です。

副賞の授与は、紀伊國屋書店東京営業本部課長の高橋 篤^{あつし}様にお願いいたします。

(拍手。「おめでとうございます。高橋様にもありがとうございます。ございました。)

三省堂書店賞は、文学部3年吉田辰夫^{よしだ たつお}さん、受賞作品は、湯本香樹実^{ゆもと かずみ}著『夏の庭:The friends』です。副賞の授与は、三省堂書店明治大学駿河台売店長の川崎千尋^{ちひろ}さまにお願いいたします。

(拍手。「おめでとうございます。川崎様にもありがとうございます。ございました。)

これより、副賞の授与は、再び畑中副館長にお願いいたします。

丸善株式会社賞は、理工学研究科前期課程1年大洞敦史^{だいどうあつし}さん、受賞作品は、福永武彦^{ふくながたけひこ}『愛の試^{こころ}み』です。

(拍手。「おめでとうございます。」以下同。)

佳作は、2編あります。

まず、理工学研究科前期課程1年宋^{そんじゆふん}済勲さん、受賞作品は、モンテスキュー著『ローマ盛衰原因論』です。(韓国語もアナウンスする)
가작은들입니다.

하나는

이공학연구과 전기과정 1 학년 송제훈 씨

수상 작품은 몽테스키외의 “로마 성쇠 원인론” 입니다.

「おめでとうございます。축하드립니다.」(ただし、宋さんは欠席)

つぎに、情報コミュニケーション学部4年清^{しみずゆうき}水勇樹さん、受賞作品は、芹^{せりざわしゆんすけ}沢俊介著『家族という絆が断たれるとき』です。

以上をもちまして表彰状、副賞の授与を終了いたします。受賞者の皆様にもう一度盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)

どうもありがとうございました。

5. 講 評

吉田図書館長

6. 受賞者の言葉

受賞者代表 最優秀賞 川島かつ江

7. 閉 会

中央図書館事務長



受賞者代表として感謝の言葉を述べる最優秀賞の川島かつ江氏(左)と受賞者の皆さん(右)

表彰式に続いて、経営企画部広報課員による記念写真撮影をおこなった。終了後、23階のサロンで希望者参加の茶話会を行い、改めて受賞後の感想や意見の交換を行い、懇親を深めた。

10 おわりに

若干の私見と課題を記して、結びとしたい。

本は、洪水のように連日出版される。かぎられた時間の中で、何を讀むべきか。思い悩む人は、多いだろう。だから、より良い本を探す上で、書評は頼れる「道案内」となるのである。

書評は、読者と著者とをつないでくれる。書評が面白いと、その本を讀んでみたい気になるし、その逆もありうるだろう。

書評に感動した人は、まるで景色の美しい山頂にたどりついたクライマーのような高揚感を覚えるかもしれない。また、読書も充実するような予感を持つかもしれない。つまり、良い書評は、自分以外の人間をも動かすことができるのである。

読書は、自分が体験できない世界を探訪させてくれる。読むべき本を探している読者に、書評者の感性というフィルターを通じて、道案内となる「書評」を提供していただきたい。そして書評者自身も、より高次元のアルピニストをめざしてほしい。

おわりに、次回の書評コンテストの応募者に期待する点を記しておく。

本の内容を語ることで、読みたさを促す工夫をこらしてほしい。

著者を語ることで、本への興味を増す工夫を一層試みていただきたい。

筋立てのみを紹介するのが、書評ではなかろう。

より素晴らしい本に出遭う努力を継続してほしい。そのために、生活動線の一部に図書館を組み込んでいただきたい。

言葉や表現の巧みさに自己満足しないでほしい。

魂の糧になる力作・大作や良書を読破した応募者が、一人でも多く書評作品を提出してくださるよう切に願いたい。

たまには、「文学を熱く語ろう」。数十年後のあなたにとって、きっと楽しい青春の思い出となるはずである。